慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エリオットの伝統論とインディビジュアリズム : 「外部の権威」と「内部の声」
Sub Title	Eliot's traditionalism and individualism : "on outside authority" and "the inner voice"
Author	山本, 証(Yamamoto, Akashi)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1977
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.22 (1977.) ,p.98- 105
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	原報
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000022-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

共立薬科大学
Annu. Rep. Kyoritsu
Coll. Pharm.

エリオットの伝統論とインディビジュアリズム
——「外部の権威」と「内部の声」——

山本　証

Eliot's Traditionlism AND Individualism :
On 'Outside Authority' and 'the Inner Voice'

AKASHI YAMAMOTO

(Received September 30, 1977)

S. Spender, in his youth, criticized T. S. Eliot's viewpoint on his politics and religion, which is an 'escape' from social responsibility, since Eliot declared to become a classicist, Royalist and Anglo-Catholic in 1927. Eliot, however, suggested in his early days, that the artist should have the sense of tradition and understand the problem of order, that is, he advocated that the artist ought to escape from personality, or 'the inner voice', and obey 'authority outside the individual' in *Tradition and the Individual Talent* and *The Function of Criticism*. He said that, for to those who obeyed the inner voice, nothing about criticism would have the slightest value, they would have no meanings to find any common principles for the pursuit of criticism.

My critical views on Eliot's traditionalism and the individualism are the following three standpoints. What I want to say, first of all, that his principle of escaping from 'the inner voice' or 'the inner world' and allegiance to 'outside authority' or 'the outer world' is to be alternative, but, said C. Caudwell, both the inner and outer world interpenetrate in literary works. Secondly, Eliot's 'outside authority', as H. J. Laski pointed out, has no persuasive power in the modern times, since it is very much classical and conservative. Unless there is a common worldview of reality, there cannot be a common view of literature.

Finally, I conclude that Eliot's worldview is projected in *The Waste Land* and *Four Quartets*, and that he, as A. West criticized, wants to escape from crisis and uncertainty in the present days and yet to retain the old social order, using the past for his own peace. Because he doesn't want to change the crisis, he casts off the common views on the real world. He cannot help being imprisoned in the dark, static, sceptic world of meditation as an individualist.

S・スペンダー Stephen Spender (1909—) は自伝『世界の中の世界』*World within World* の中で，1930年頃ロンドンのクラブで初めてT・S・エリオット T.S.Eliot (1888—1965) と会食した時の想い出を書いている[1]。当時オックスフォードの学生であった新人スペンダーは，ぶしつけにも『荒地』の大詩人エリオットにむかって，「西欧文明の未来はどうか」と訊ねた。エリオットは答えて「政治的には未来はないと思う。ただ相互殺戮 internecine conflict いがいには……。」と言った。この点，エリオットと見解を異にしていた当時のスペンダーは，エリオッ

トの態度が社会的・政治的行動に対する否定と絶望の態度であると批判している。そしてまた，彼はエリオットの宗教観について手紙で質問を書き「私はエリオットの宗教を社会的責任からの'逃避'と考える[2]。」と攻撃した。エリオットは「宗教はスペンダーが考えているほど効果的な逃避ではない。たいていの人は小説や映画や猛烈なスピードに安易な逃避を見出しているが，だいじなことはスペンダー自身が原罪を信んじるかどうかということだ。」と大要このように答えたいという。初期のスペンダーはエリオットの言う「原罪」などを信じることはまちがいだと考え，エリオットの政治的態度と伝統主義を批判した。しかし，彼はエリオットを批判しながら，心の奥底で罪をおかしているようなやましい気持を感んじ，エリオットに弁解の手紙を書いて折衷的主義的態度をとる。これはのちにスペンダーが，たとえば『創造的要素』*The Creative Element*, 1954 などで，心の奥底でエリオットの世界観に傾倒していった[3]姿を予見させるものである。

スペンダーが，エリオットに西欧文明の未来を訊ね，彼の社会的・政治的態度が否定と絶望の態度であると批判し，エリオットの宗教を彼の社会的責任からの「逃避」と見なしたのは，明らかに，エリオットの1927年の例の宣言——文学的には古典派，政治的には王党派，宗教的にはアングリカン・カトリック——へのリアクションである。『プルーフロック』*Prufrock*, 1917,『詩集1920年』*Poems*, 1920,『荒地』*The Waste Land*, 1922 で，現代の戦慄ともいうべき崩壊感覚に深く根ざした現代文明の告発の詩を描き，灰色の1920年代の青年の現実認識に衝撃を与え，モダニズムの詩の技法に圧倒的に影響したエリオットが，1927年にイギリスに帰化し，宗教的に改宗し，政治的に超保守主義を宣言したことは，エリオットの「転向宣言」のように受けとられたのも無理のないことである。しかしながら，エリオットの保守主義と宗教への傾斜は，初期の彼の評論を具体的に検討してゆけば，いわばエリオットの体質としてもともと本来的に彼に備わっていたことが明らかになろう。

エリオットは『伝統と個人的才能』*Tradition and the Individual Talent*, 1919 と『批評の役割』*The Function of Criticism*, 1923 の中で，彼の「伝統論」と「秩序の問題」について展開している。むろん，これらの評論は政治学や宗教学の論文ではなく，あくまで文学批評として書かれたことに留意する必要があるが，エリオットの保守的な世界観が，いかに彼の古典主義の文学観や詩作に顕在化されて反映しているかを見きわめるためには，興味のあるものである。エリオットはかなり早くから文学的価値に対する宗教的・保守主義的裁断をおこなっていたのだ。

たとえば，エリオットは浪慢主義者M・マリイ Middleton Murry (1889—1957) が「カトリシズムの原則は，個人の外部に或る精神的な権威を認めてこれに絶対に服従することにある。……そしてこれが古典派文学の原則である。」といって古典主義に反発したのに対して，「人間といいうものは自分の外部にある何ものかに忠実でなければ，やってゆけないのだと考える……もし我々が忠実であるべき権威が我々の外部にあると想像しなければならないならば，それが外部にある'と決めても構わない[4]。」という。そしてある人間の関心が〈政治的〉なものならば「幾つかの原則」「ある政体」「一人の国王」への忠誠であり，〈宗教的〉なものであるならば「ある教会」への忠誠であり，〈文学的〉なものであるならば古典主義に忠実でなければならぬとする。

エリオットのこのような文学的価値の裁断はとりもなおさず，あれこれの文学的価値の取捨

選択である。「大概の批評家がものごとの輪郭をぼかして，調停したり，闇に葬ったり，……目をつぶったり，快い麻酔剤を調製したり，自分達と他の人間の違いは，ただ自分たちはちゃんとした人間で，他の人間はそうでないということだけだという振りをしたりすることに専念している今日[5]」，〈内部の声〉に従って「自分の好きなとおりに」することを拒否し，〈外部の権威〉を基準として文学的価値を裁断しようとするのである。こうした立場からエリオットは，浪慢主義を部分的なもの，未熟なもの，混沌としたものとして排撃し，古典主義を完全なもの，成熟したもの，整然としたものとして擁護するわけだ。エリオットは，したがって，マリイの浪慢主義的・主観的傾向——「自分というものをどこまでも堀り下げてゆくならば，……やがて普遍的な自分を発見する筈」であり，「最終的には内部の声に頼る他ない」という態度を，理論的には汎神論を導くとして非難する。その理由は「この内部の声が聞えるのはいつもそれに従っているので他の声を聞こうとしない[6]」からであり，「内部の声に従うものであるならば……批判するために何か共通の原則を求めることは彼等にとって無意味」となり，「芸術を支配する法則は，凡て個々の場合に従って決める判例法 all case law ばかり[7]」となるからである。つまり，〈内部と声〉に服従するかぎり，作品として完璧であるかどうかを選択し，評価できない「一人よがり」の態度だと揶揄するのである。

すでにエリオットは，1919年に『伝統と個人的才能』のなかで，「情緒 emotion からの逃避」「個性 personality からの逃避」，すなわち〈内部の声〉の拒絶と，「歴史的感覚 historical sense」「過去の意識 the consiousness of the past と秩序の観念 the idea of order」にもとづく伝統論，すなわち〈外部の権威〉の擁護の定式化をおこなった。「現在のさまざまなすぐれた芸術作品は，それだけで相互にひとつの理想的な秩序を形成しているのであるが，そのなかに新しい作品が入ってくることにより，この秩序に，ある変更が加えられる。……こうして個々の作品それぞれの全体に対する関係，釣合い，価値が再調整される[8]。」新しい（真に新しい）作品が過去の秩序にうまく適合することが文学作品の試金石の一つであり，現在あるがままの自己を，より価値のあるものにゆだねること，すなわち，たえざる「自己犠牲」と「個性の滅却」が芸術家の進歩の指標だという。

したがって，エリオットの伝統論にもとづく文学論の根幹は「芸術家は彼の外部にあるものに服従しなければならず」「共通の遺産と共通の目的」をもって「他の人間と協力し，交換を行ない，共通の仕事に寄与する」こと，「批評家は，自分の個人的な偏見や気粉れを，そういう欠点を努めて矯正し，真実の判断を共同して求めようとして，なるべく多くのものと協調する[9]」ことである。それ故，批評の目的と方法を決めるためのエリオットの原則は，文学上の「個人主義（インディビジュアリズム） individualism」と〈内部の声〉を拒否し，「伝統論」に規定された〈外部の権威〉を主張することである。

初期のスペンダーのエリオット批判に戻ろう。オーデンはエリオットの例の三つの宣言に対するリアクションとして，エリオットの態度が社会的・政治的行動に対する絶望と否定であり，彼の宗教が，社会的責任からの「逃避」であると批判したのであった。この批判をエリオットの初期の評論の定立（テーゼ）と詩作に遡及させ，彼の「伝統論」にもとづく文学的価値の裁断が，たんに個性からの「逃避」にとどまらず，社会的責任からの「逃避」であることを解明するためには，基本的な批判的観点をどこに置くべきであろうか。さしあたり，次の三つの問題点が設定

されよう。第一は，エリオットが文学批評の原則を確立する上で，〈内部の声〉と〈外部の権威〉，「内的世界」と「外的世界」，つまり「個」と「全体」を二律背反的・対立的に設定したことのもつ矛盾点である。第二は，彼の〈外部の権威〉が世界観として現代社会に普遍性をもち得るか否かの問題である。第三は，以上の問題点とのかかわりで，エリオットの世界観・歴史観そのものに内在する矛盾の詩作への反映の評価である。

第一の問題点から始めよう。この点に関するエリオットの最大の文学批評に対する貢献は，「芸術のための芸術」を提唱した芸術至上主義や，エリオットのモダニズム的側面の後継者であるイメージ論・分析批評・新批評・解釈批評などが，その文学批評の方法として，何んらかの意味で文学の自己充足的・自己完結的世界＝文学の〈内部の声〉の絶対化を試ろみ，文学を歴史や社会現実のコンテキストから遮断し，言語内容と社会現実の相関関係を肯定する実在論（リアリズム）から離脱して言語世界の自律性を主張する大規模な文学運動を展開していったなかで，少なくともエリオットは〈内部〉と〈外部〉の主＝客関係を明確に打ち出し，〈外部〉の復権を（内容の検討はしばしおくとして）主張したことにある。しかしながら，エリオットの最大の誤謬は，〈内部〉と〈外部〉の主＝客関係を敵対的矛循・対立，すなわち二者択一的対立として設定したことであろう。

たとえば，C・コードウェル Christopher Caudwell (1907—1937) が指摘するように，19世紀から20世紀にかけての詩が「社会的な芸術の世界」から私的な夢想の「個人的世界」へ，つまり個人主義（インディビジュアリズム）へと急転回していったこと，「芸術のための芸術」は実は「私のための芸術」にむかう運動であり，シュールレアリズムやサンボリズムが，主観的には芸術家の理想的な自由の実現を目ざしていると信じながら，客観的には社会的実現に対峙して私的な「内部の声」の情緒をアナキスティックに拡大再生産していったことは首肯されよう。この場合，芸術を支配する法則は，個々の「好ましい」場当りで，一人よがりの判例法によらねばならず，批評における何らかの共通の基準・原則を設定することが不可能であることは，エリオットの指摘したとおりである。しかし文学における〈外的世界〉との関連を否定し，〈内的個性〉を絶対化したインディビジュアリズムの閉鎖性が誤謬であるならば，逆に，エリオットが没個性を提唱し〈内的個性〉からの「逃避」ないし否定を主張し，〈外的世界〉によって文学的価値の裁断を試行しようとしたことは，両者を敵対的・対立的概念としてのみとらえ，二律背反の二者択一的概念として設定する誤謬を犯かしていると言えよう。

わたしはここで，文学における〈内的個性〉と〈外的世界〉の折衷主義を言おうとしているのではない。問題なのは，文学批評における両者の対立的側面を統一的に把握することなしには，文学的価値の裁断の原則を確立できないと主張したいのだ。文学はあらゆる芸術と同様そもそも，作家の創造的営為からして個人的な側面をもつ[11]。作家個人が社会や自然の外的圧力に反応し，そこからくる衝撃によって作家の内的エネルギーが起爆することをとおして作品が形象化されるという側面である。読者の側からいっても，作品はまず彼の感受性に衝撃を与え，その感動をとおして，読者の内的経験を充足させるという個人的側面をもつ。その意味では文学は具体的・個別的・偶然的な「現実の現象的認識」であり，〈内的個性〉の発露である。しかし同時に，すぐれた文学作品は，具体的形象のなかに抽象的意味を，個別性のなかに普遍性を，偶然性のなかに必然性を貫徹していなければならない。つまり〈内的個性〉は〈外的世界〉と対立して，自己を実現するのでもなければ，〈外的世界〉は〈内的個性〉から逃避して文学的価値

を裁断することが可能なわけでもないのである。両者の対立的側面を弁証法的に統一してこそ，文学批評の原則を確立できるのだ。エリオット流に言えば，一流のすぐれた文学は「個性」からの逃避ではなく「個性」の范濫の表現を貫徹することによって，〈外的世界〉すなわち社会現実や歴史のなかでの普遍的・典型的価値を獲得することができるのである。換言すれば，個性という内的・私的「自我」は，共通の普遍的・典型的「自我」，つまり社会的「自我」として，その文学的価値を獲得することができるのである。

〈内的個性〉と〈外的世界〉の主＝客関係と統一的に把握せねばならぬ必然性は，文学の媒体である言語そのものの本性からも言える。文学は人間の感性を表現するという主観的〈内面的個性〉を「共通の一致した言語という諸記号」で表示するという面と，その内容に普遍的な意味をもたせるために，人間の共通な知覚的に認識される世界観としての客観的〈外的世界〉を「共通の一致した言語という諸記号」で表示するという面をもつ。コードウェルは言う，「われわれが外的現実についての自分の経験の一部を他人に伝達できるのは，一致した諸記号をもつ一つの共通の知覚的世界が存在するからだ」「同じようにわれわれがもろもろの感情を他人に伝達できるのは，一致した諸記号をもつ一つの共通した感情的世界があるためだ[12]。」前者の「共通の知覚的世界」は現実の外的世界，社会の意識に反映する真理であり，後者の「共通の感情的世界」は，まさに私的・内面的個性であり，それが社会的経験の試練をうけるなかで社会的自我としての価値を獲得する。つまり，両者ともに，言語という歴史的・社会的な産物としての共通の一致した記号を媒体として伝達されるわけである。そして，「客観も主観もけっして完全に〝純粋〟ではなく，この〝不純さ〟は言語に反映されている……共通の世界と共通の自我は別々に離れて存在するのではなく，相互に浸透しあっている[13]」のである。したがって，文学の言語そのものが〈内的個性〉と〈外的世界〉の両面価値(アンビバランス) ambivalance を，そもそもその本性において包括的にもっているわけだ。文学の自律性と他律性は相互に矛循する二者択一的なものではなくて，その両側面が分離しがたく統一的に相互に浸透しあって，文学のなかに包括されているのである。

第二の問題にうつろう。エリオットのいわゆる〈外部の権威〉が現代文明の危機的状況を打開するための普遍的説得力をもつか否かの問題である。コードウェルは，エリオットが「現代の病患を示す最良の臨床画」であり「詩人とその読者との間に何一つ共通の世界観がない。」「かれが共通と考えている世界観は，じつは一つの幻想である。現実についての共通の世界観がないかぎり，文学上も共通の世界観はありえない[14]。」と，エリオットの伝統論と〈外部の権威〉の秩序にもとづく歴史成感覚のリアリティの欠如を批判した。

エリオットの〈外部の権威〉は，宗教的にはイギリス国教会の「39ヶ条信仰個条」(1571年エリザベス一世の制定）の神学であり，政治的には超保守派であった。エリオットはこれらの権威を1930年代以降，とりわけ『宗教と文学』*Religion and Literature*, 1935,『キリスト教社会の理念』*The Idea of a Christian Society*, 1938,『文化の定義のための覚え書き』*Notes Towards the Definition of Culture*, 1948などで，すこぶる能弁に唱道する。そして，これらの〈外部の権威〉の源流がエリオットの初期の文学評論のなかにあることは，すでに見てきたとおりである。

それらのエリオットの世界観が，現代の読者との共通の世界観の上にたって，未来のあるべき価値大系のなかでの必然性を獲得していないと裁断したのが，初期のスペンダーであった。な

るほど，エリオットの『プルーフロック』の厭世感から『荒地』の現代文明の崩壊の告発に形象化された情緒は，第一次大戦後の状況を典型的に暴露した点で衝撃であった。エリオットは適切にも『詩の効用と批評の効用』*The Use of Poetry and the Use of Criticism*, 1933の中で次のとおり言う。「社会的にみてもっとも有用な詩は，現代における大衆の趣味のあらゆる層——社会的な崩壊のきざしをみせているあらゆる層をつらぬいて，全部にうったえかけることのできる詩である[15]。」つまり，エリオットは詩が説得の術であると述べ，「詩は感受性の革命をなしとげるでしょうし，また，たえず作られてゆく知覚や価値の因襲的なしきたりをやぶったり，人々が世界を新らしく見なおしたり，その新らしい面に目をむけたりする助けをしてくれるでしょう。詩は私たちの存在の土台を作っている，ずっと深いところの面に目をむけたりする助けをしてくれるでしょう[16]。」と言うのだ。

しかしながら，エリオットのいう「存在の土台をつくっている，ずっと深いところの面」とは何を指すのか。それは彼の〈外部の権威〉が意味する世界観なのである。H・ラスキ Harold J. Laski (1893—1950) が手厳しく批判したように[17]，エリオットは一面では現代の荒廃した世界を極度に憎み，大衆への侮蔑を基調にした選民意識から世俗主義に反抗し，現在の諸価値の崩壊を形象化しながら，他方では，来るべき諸価値大系の未知の変化——新しい統合への前進をもっとも怖れ，既にヨーロッパの価値大系としても共通の普遍性を衰微させてしまった過去の価値をいかに回復しようとするかに腐心するのである。彼の〈外部の権威〉は文明の腐敗に直面した特権階級が，見るに堪えない現実から「逃避」するための一つの技術であり，エリオットの能弁は，歴史上決着ずみの過去の価値観にしがみつく退行現象にすぎないのではあるまいか。その意味では，エリオットの〈外部の権威〉は，コードウエルの言う「共通の知覚的世界」＝〈外部の権威〉の普遍的な説得力をもちえなかったのである。

さて，結論として，第三の問題点を考察しよう。第一，第二の問題点とのかかわりで，エリオットの世界観・歴史観そのものに内在する矛盾が，基本的にはどのようにエリオットの詩作に投射されているかという点である。

エリオットが浪漫主義を拒絶した根本的な理由は，浪漫主義のなかに産業革命以降の近代社会の精神的腐敗堕落と世俗主義を見たからである。そして，それに対する憎悪が彼を古典主義と政治上の復古主義に駆り立てたのだ。このような復古的伝統主義にもとづくエリオットの文学的価値の裁断は，『プルーフロック』や『荒地』『うつろな人々』*The Hollow Men*, 1925などの詩作のなかに色濃く投射されている。それは，基本的には，近代産業資本主義の成果の否定と，その矛盾・破綻の宣言であり，近代資本主義社会に対する厭世的で空虚な現代人の魂の叫びでもある。しかし，芸術におけるエリオットの近代の拒絶は，政治的には超保守主義というかたちをとって，近代産業資本主義の本質を支持し擁護するものであった。ここに，芸術における「近代の拒否」と政治における「近代の容認」という二元論にエリオットが落ちこんだ陥穽があり，〈内部の声〉からの逃避と〈外部の権威〉の唱道というエリオットの定立（テーゼ）の矛盾の反映がある。

エリオットは「もし詩が公共の事業を記念し，お祭りを祝い，宗教的な儀式をかざり，群集をよろこばすことができれば，なおさら結構[18]」と言う。詩がこのような社会的機能をはたすことができるのは，その社会が共通の普遍的世界観・価値観によって支えられている場合に限られる。たとえば，古代原始社会や，近代以降であるならば，特定の地域社会とか共同社会な

どがそれであろう。しかしながら，近代の産業資本主義社会のあれこれの世界観は，あまねく諸価値大系の崩壊過程と多様化を表現していることはすでに指摘されているとおりである。現代文学に表現された幻滅と倦怠は，諸価値大系の瓦解の投射であり，もし唯一の世界観が残存しているとすれば，共通の価値観を喪失して，個々に多様に分解したことを表現する世界観，すなわち個人主義（インディビジュアリズム）であろう。エリオットが，こうしたインディビジュアリズムの〈内部の声〉に反抗し，価値大系の再構築として〈外部の権威〉を求めた動機には理由のあることである。しかし，この動機が正当性をもつためには，近代のもつ価値大系の積極面，たとえば民主主義や科学主義を発展的に継承しながら，きたるべき未来の価値大系へ新しい統合のための前進を模索することではあるまいか。エリオットは，それとは逆に〈外部の権威〉を過去の価値大系——古典主義とイギリス国教会と国王——に求めた。しかも，それはシジフォスの葛藤のごとき孤独の闘いであった。〈内部の声〉という個人主義に反抗しながら，新たなインディビジュアリズムの鎖に繋がれたのである。

コードウエルは，エリオットは「現在が過去に向って自己を放棄しているのだから，希望はありえない[19]。」と言う。そのとおり，未来への希望はないのである。アリック・ウエスト Alick West が，『荒地論』の結論で述べているように[20]，現代の危機と不安の状況からの「逃避」を求めつつ，しかも過去の社会的秩序のなかに逆行しようとするエリオットは，過去のなかに，自己充足的な個人主義者としての「平安」を捜すのである。

『荒地』の終曲は次のように奏でられる。「わたしは岸辺に腰をおろして／魚を釣る，乾からびた平野に背をむけて／せめてわたしの国土でも整理しようか／ロンドン橋がおっこちるおっこちるおっこちる[21]」……「こんな切れっぱしでわたしはわたしの崩壊を支えてきた／ではあなたのおほせに従ひましせう。ヒーロニウがまた気がふれた。／与えよ（ダッタ）。共感せよ（ダーヤジヴァム）。自制せよ（ダムヤータ）。／平安（シャンティ） 平安（シャンティ） 平安（シャンティ）[22]」

'I sat upon the shore / Fishing, with the arid plain behind me / Shall I at least set my lands in order ? / London Bridge is falling down falling down falling down' …… 'These fragments I have shored against my ruins / Why then Ile fit you. Hieronymo's mad againe. / Dotta. Dayadhvam. Damyata. / Shantih shantih shantih' この「平安」が，未来への希望の発露ではなく，「希望」を喪末したものが救済を求めた表現であることは『四つの四重奏』*Four Quartets*, 1935—1942のなかで，さらに絶望の拡大再生産がなされ，「瞑想の世界」への沈潜を深めていることを見れば肯定されよう。

「廻る世界の静止する一点。肉でもなく肉でもない／そこからでも，そこへでもない，静止の一点に舞踏がある[23]。」'At the still point of the turning world. Neither flesh nor fleshless ; / Neither from nor towads ; at the still, there the dance is, ' 「下へ下へと降りて行け，ひますら降りて／不断の孤独の世界に入れ[24]。」'Descend lower, descend only / Into the world of perpetual solitude,' こうしたエリオットの最後の詩に投射された世界観は，歴史の動態的（ダイナミック）dynamic な活力から「逃避」した隠遁者の静態的（スタティック）static な「歴史感覚」そのものである。初期のスペンダーが批判したように，現実の社会変革に絶望し，社会的責任を放棄したエリオットは，「宗教」へと逃避し「死の世界」へ埋没し，「暗い暗い暗い。すべては暗黒（くらき）に帰して行く。／星と星との間の空なる空間に，空は空に—— [25] 」'O dark dark dark. They all go into the dark, / The vacant interstellar spaces, the vacant into vacant, ' と一人のインディビジュア

リストとしてみずからの〈外部の権威〉が失墜したことを告白し，「原罪」の鎖に繋がれ奈落の底へと没してゆくのである。

〔注〕

1) S. Spender, *World within World*, (Hamish Hamilton, 1951), PP. 145—148. 高城楢秀・小松原茂雄・橋口稔共訳『世界の中の世界（スペンダー自伝）』（昭31・南雲堂）第1巻，181—184頁。なお，S・スペンダーがT・S・エリオットに初めて会って，この会話を交わしたのは，正しくは，1928年5月18日オックスフォードのユニバシティ・カレッジであると訂正されている。〔福田陸太郎・徳永暢三共訳『スペンダー評論集』（昭43・英潮社）8章「T・S・エリオットの想い出」125頁。*The Encounter*, (April, 1965)
2) *Ibit.*, P. 148. 邦訳，183頁。
3) S. Spender, *The Creative Element, A Study of Vision, Despair and Orthodoxy among Some Modern Writers*, (British Book Center, 1954 ; Reprint of the 1954ed. , Folcroft, 1973), Chap. 3 深瀬基寛・村山至考訳『夢を孕む単独者・創造的要素（第1部）』（昭31・築摩書房）第3章。
4) T. S. Eliot, *The Function of Criticism*. 1923 (*Selected Prose of T. S. Eliot*, Faber, 1975), PP.70-71. 邦訳『エリオット全集』第3巻（昭35・中央公論社）30頁。
5) *Ibit.* ,P. 70. 邦訳，30頁。
6) *Ibit.* , P. 71. 邦訳，31-32頁。
7) *Ibit.* , P. 72. 邦訳，34頁。
8) T. S. Eliot, *Tradition and Individual Talent*, 1919 (*Selected Prose of T. S. Eliot*, Faber, 1975) PP. 38-40. 邦訳『全集』第5巻，7-10頁。
9) T. S. Eliot, *The Function of Criticism*, PP. 68-69. 邦訳，28-29頁。
10) C. Caudwell, *Illusion and Reality*, (Lawrence & Wishart, 1937), PP. 108-111. 玉井茂・深井龍雄訳『幻想と現実』（昭47・未来社）165-168頁。
11) *Ibit.* , P. 116. 邦訳，175頁。
12) *Ibit.* , P. 150. 邦訳，227頁。
13) *Ibit.* , P. 152. 邦訳，230頁。
14) C. Caudwell, *Romance and Realism*, (Princeton University Press, 1970), PP. 127-128. 玉井茂・深井龍雄，山本昭夫訳『ロマンスとリアリズム』（昭52・法政大学出版局）167-168頁。
15) T. S. Eliot, *The Use of Peotry and the Use of Criticism*, (Faber, 1933) PP. 152-153.『全集』第3巻，183頁。
16) *Ibit.* , P. 155. 邦訳，184頁。
17) H. J. Laski, *Faith, Reason, and Civilization*, (George Allen & Unuin, 1944), Chap. 10, Chap. 15. 中野好夫訳『信仰・理性・文明』（昭26・岩波書店）10章，15章。 *The Dilemma of Our Times*, (Kelly, 1952) Chap. 7. 大内兵衛・節子訳『岐路に立つ現代』（昭35・法政大学出版局）
18) T. S. Eliot, *The Use of Peotry and the Use of Criticism*, P. 155.『全集』第3巻，184頁。
19) C. Caudwell, *Romance and Realism*, P. 128. 邦訳，169頁。
20) Alick West, *Crisis and Criticism*, (Lawrence & Wishart, 1937, Reprinted in 1975), P. 36.
21) T. S. Eliot. *The Waste Land*, (Faber, 1922), ll. 424-427. 邦訳，深瀬基寛『エリオット』（昭29・筑摩書房）273-274頁。
22) *Ibit.* , ll. 431-434. 邦訳，上掲書，274頁。
23) T. S. Eliot, *Four Quartets : Burnt Norton*, (Faber, 1935), ll. 63-64・二宮尊道訳『四つの四重奏』（昭41・南雲堂）16頁。
24) *Ibit.* , ll. 117-118. 邦訳，21頁。
25) *Ibit.* : *East Coker*, (Faber, 1940), ll. 102-103. 邦訳，36頁。